

〔北総文化研究センターから〕

## 公開講座報告

平成19年度には、10月13、20、27日（いずれも土曜日）の3回にわたって、学外の市民を主たる対象者として（もちろん本学の学生参加者もあった）、「公開講座」が開催された。以下は、その実施報告である。

### 1. 主催者と総合テーマ

主催者 愛国学園大学

総合テーマ 「世界の文化・日本の文化」

### 2. 場所及び事務局

場所 本学1号館2階 視聴覚室

事務局 本学学務課

〈各回のテーマ、講師、講義内容の要旨〉

### 第1回

1. 日時 2007年10月13日(土) 10時～12時

2. テーマおよび講師

テーマ 「西洋絵画鑑賞法—寓意と象徴から絵画を読み解く—」

講師 堀川麗子 講師

### 3. 講義内容

絵画の見方には、「様式」から見る見方と「主題」から見る見方がある。つまり、色や線などの造形的要素に着目し「どのように」描か

れているかという点から絵を見る方法と、内容すなわち「何が」描かれているかに着目する見方である。特に18世紀以前の西洋絵画では、描かれている物にある一定の意味が付されていることが多いので、何が描かれているかを見て、さらにそれが何を意味しているかを読み解くことが作品鑑賞の重要な過程となる。

例えば、17世紀には「ヴァニタス画」という静物画の一種が数多く描かれた。「ヴァニタス」とはラテン語で「はかなさ、虚しさ」を意味するが、色々な種類の「虚しさ」を象徴する事物をテーブル上に並べて描き、全体で「現世の虚しさ」を表現する絵画を「ヴァニタス画」と呼ぶ。よく描かれるものとしては、割れやすいことを暗示するグラス、時間を表す砂時計や懐中時計、すぐに消えてなくなる煙やシャボン玉などがある。これらは知識がなくても経験上「はかないもの」という意味を比較的想像しやすいものであるが、他に巻貝、ラッパ、刀などが描かれることもあり、それぞれ財力（巻貝は美術品として金銭的価値があるものだった）、名声、武力を象徴している。そして「はかない」ことを示すこれらの諸物を「死」の象徴である髑髏と並

べて描くことで、「生の虚しさ」、「死の勝利」という寓意的なメッセージを伝えようとしているのである。

また、西洋には目に見えない概念を人物像として表現する「擬人像」という伝統的な形式がある。例えば「真実」という概念は通常、絵画に表わすのは困難のように思えるが、西洋美術ではこのような概念を視覚化するための決まりごとが存在している。抽象的な概念は特に女性像で描かれることが多く、着ている物や持ち物によって意味が付される。例えば、「真実」の擬人像は通常裸体として表され、何も包み隠していないことを示している。手には真実を明るみに出すための光（太陽やランプ）を持ち、真実が全ての上に立つことを表すために片足を球体（地球）に乗せる。つまり、もしある絵画の中に裸体で光を持ち、球体に足を乗せている女性を見つけたならば、それは「真実」の擬人像である可能性が高いということになる。

このように、意味のコードを少し知るだけでも絵画の鑑賞は数段深く、そしておもしろくなっていく。

## 第2回

1. 日時 2007年10月20日(土) 10時～12時

2. テーマおよび講師

テーマ「東洋の宗教—東南アジアにおける上座仏教を中心に—」

講師 高橋美和 准教授

3. 講義内容

上座仏教—すなわち、日本でしばしば「小乗仏教」と呼ばれる南方の上座仏教とはどのようなものなのか。東南アジア大陸部の一国、カンボジアを事例として、人々の日々の暮ら

しや年中行事、人生儀礼など様々な場面における具体的な実践の様子を通して紹介した。

前半、上座仏教の成立過程の簡単な説明の後、カンボジアにおける仏教の概要を述べた。元々ヒンドゥー教が優勢だったカンボジアにスリランカから上座仏教が伝わり、受容されたのは13世紀頃で、現在、国教である。しかし、1975年から3年余り続いたポル・ポト政権下で仏教が一旦壊滅状態となるという、特異な歴史を経験した。政権崩壊後、寺院の再建が進み、現在、寺院数・僧侶数ともに内戦前の水準にほぼ戻っている。

一般の在家のカンボジア人は、僧侶と寺院を支える布施行に励む。それは功德を生み出す行為である。日々の僧侶の托鉢に応じ、陰暦で毎週めぐってくる「戒律日」や様々な仏教祭に寺院を訪れて説法を聞き、また冠婚葬祭には寺院から僧侶を自宅に招請する。子世代が親のために開催する長命祈願儀礼、パチャイ・ブオンは、親にとって子孫に囲まれた幸福な老後を象徴する儀式であると同時に、招かれた大勢の僧侶に多額の布施をすることによって大きな功德を生み出す機会である。

寺院には、「律」に則った修行生活を送る黄衣の僧侶が住まう。規律ある清浄なる生活を送ることこそ、僧侶を僧侶たらしめている。僧侶の過半数は仏教教育課程を学ぶ若い学生僧侶であり、寺院は男性の教育機関の一つとなっている。寺院にはまた、剃髪して白い衣を着た俗人修行者も多く住まう。高齢者の多くは、在家戒を日々遵守する持戒生活に入るが、人生の終末期を修行者として寺院内で過ごすという選択もカンボジアにはあるのである。

カンボジア人の仏教信仰と実践は、日々の暮らしだけでなく、生涯通して生活の支えとなる重要なものであることが窺える。

### 第3回

1. 日時 2007年10月27日(土) 10時～12時
2. テーマおよび講師

テーマ「日本中世の文学—西行の和歌と伝説・心の文化史—」

講師 宇津木言行 准教授

### 3. 講義内容

西行は宮廷に仕える武士だったが、23歳の若さで出家して僧となった。出家の原因はよく分らない。生涯を旅と山里の草庵に暮らし、数多くの和歌を残した。生前は無名とってよかったが、晩年に至り、一部の歌人から高い評価と尊敬を受け、没後の『新古今和歌集』では作者の中で一番多くの歌が選ばれ、和歌の歴史の上に巨大な存在となった。

西行の和歌の特色は、たとえば『古今和歌集』の撰者の一人だった紀貫之のような、和歌の技能で宮廷に仕えた専門歌人といわれる下級官人の和歌と比較してみるとよく分る。専門歌人は、いわば言葉を素材にして絵画のような美術工芸品を作る感覚で歌を作った。それに対して、西行の歌は同じ花月を詠んでも、花月の美そのものをかたどるのではなく、花月に向き合う「わが心」の感じ方を歌った。西行の歌では、風景の中にほかの誰でもない西行その人が歌の主人公としてたたずんでいる観がある。抒情の危機が自覚されていた平安末期の歌の世界で、「われ」の心情を高らかに歌った西行の人間味ある歌は貴族たちにも驚きを以て次第に迎えられていった。西行ほど深く心を見つめた和歌を詠んだ歌人はほ

かにない。

西行の歌集『山家集』に「願はくは花の下にて春死なんその如月の望月のころ」という和歌がある。50歳以前の作で、釈迦が入滅した旧暦2月15日に自分も満開の桜、満月の下で死にたいと願望した。まさにこの歌の予言通り、西行は2月16日の朝に73歳の生涯を閉じたことが人々を感動させた。藤原定家など次代を担う若い歌人達はみな西行の死を惜しんだ。この反響が西行の伝説化の始まりとなる。

千葉県館山市に、その名も西行寺という寺があり、西行伝説を伝える。西行の妻・呉葉の前がこの地に流れ着き、死んで埋められた墓に遺言により柳を植えて柳塚という。妻の死後に西行が訪れて事情を知るといふ、全国的にみても珍しい悲劇の物語が残されている。

千葉県にはほかに東金市や佐倉市にも西行の伝説が伝わる。それらの伝説は西行を慕う数多くの無名の人々の心が育んだものだった。

世阿弥は心より心へ花を伝え、西行を尊敬した芭蕉は西行の足跡を追って奥の細道の旅へ出た。西行の心から生み出された遺産は数知れない。私達がこれから豊かな心を創造しようとするならば、このような心の文化史をふり返ってみる必要があるだろう。